

## メディアオロジー概要

index:

- 1.メディアオロジーとは？
2. レジス・ドゥブレの関連著作
3. 機関誌「Les Cahiers de médiologie」から
4. 『Le Debat』誌の批判、そして反論

### 1.メディアオロジーとは？

#### 概要

メディアオロジーは、フランスの作家、著述家として知られるレジス・ドゥブレ (Regis Debray)が提唱する新しい学問領域、または知のムーブメントである。端的に言い表すなら、それはメディア(媒体)の様態を、徹底した唯物論によって記述する学問だと言える。単純な言表が組織化、制度化されていく過程を描くには、従来の静的なコミュニケーション理論のモデルでは不十分であり、その過程を担う媒体にこそ、光を当てなくてはならないのだと説く。

ドゥブレは1941年、パリに生まれる。高等師範学校を経て哲学の教員資格を取得する。1967年に「革命の中の革命(Révolution dans la révolution)」を著し、チェ・ゲバラなど南米のゲリラ活動を煽ったとして、ボリビアで30年の刑を受ける。しかし1970年に釈放され、後に、ミッテラン大統領の任期中には大統領府(エリゼ宮)官房長官を務めた(1981-85、1987-88)。また、1977年には小説「雪が燃える(La neige brule)」でフェミナ賞を受賞するなど、作家としても活躍。政治論文など著書多数。94年にはメディアオロジー関連著作を業績として博士号、大学教授資格を取得している。

メディアオロジー構想の源泉が投獄にあったことは明らかだ。自著「一般メディアオロジー講義(Cours de médiologie générale, 1991)」で述べているように、「普遍的な革命の図式はない(「革命の中の革命」)」とのメッセージが、南米でのゲリラ活動の組織化につながり、ひいては自らの獄中生活を招いた(同書、p.179)ことに、ドゥブレはメッセージと組織との間の「ブラックボックス」を見たのだろう。そのブラックボックスの分析が、やがて79年の「フランスの知的権力(Le pouvoir

intellectuel en France)」を経て、90年代前半の一連のメディアロジー関連著作へと結実する。

### **メディアロジーは今風のマスメディア論などではない**

ある思想が運動として展開されるためには、必ずや媒体の助けを借りなくてはならず、そうした媒体が思想を取り込み組織化していく様子を記述するのがメディアロジーなのである。したがってその論は、キリスト教神学における偶像、フランス革命における印刷技術、社会主義運動における雑誌や宣伝ビラ、近代国家におけるラジオやテレビなど、唯物史観による歴史の再考という様相を呈する。これは、媒体技術と文化が相互に降りなすダイナミズムを再検討しようという、野心的な試みでもあると言えるだろう。

フランスではドゥブレのほか、グルノーブルのスタンダール大学教授ダニエル・ブーニュー(Daniel Bounoux)らを中心に、96年より機関誌「Les Cahiers de Médiologie」(年2回刊、<http://www.mediologie.org/>でも閲覧可)を刊行し、一つのムーブメントを形成している。メディアロジー的实践ということなのだろうか。

日本での紹介文としては、**青土社『現代思想』誌1996年4月号(特集：インターネット)**に、ドゥブレの講演(「メディアロジー宣言」(石田英敬訳))とシュティグレル(Bernard Stiegler)の論文(「レジス・ドゥブレの信」(廣瀬浩司訳))、さらに解説(石田英敬「『メディアロジー的転回』の条件」)が掲載されている。また、NTT出版『InterCommunication』誌第12号(95年4月)には、上野俊哉「レジス・ドブレの『メディアロジック宣言』を読む」が掲載されている。

Text: 98年1月; Revised: 99年3月

## **2. レジス・ドゥブレの関連著作**

ドゥブレは1941年、パリに生まれる。高等師範学校を経て哲学の教員資格を取得する。1967年に「革命の中の革命(Révolution dans la révolution)」を著し、チェ・ゲバラなど南米のゲリラ活動を煽ったとして、ボリビアで30年の刑を受ける。しかし1970年に釈放され、後に、ミッテラン大統領の任期中には大統領府(エリゼ宮)官房長官を務めた(1981-85、1987-88)。また、1977年には小説「雪が燃える(La neige brule)」でフェミナ賞を受賞するなど、作家としても活躍。政治論文など著書多数。94年にはメディアロジー関連著作を業績として博士号、大学教授

資格を取得している。

### メディアオロジー関連著作

**Le pouvoir intellectuel en France (フランスの知的権力), Ramsay, 1979**

**Le scribe (書記), Grasset, 1980**

[Cours de mediologie generale \(一般メディアオロジー講義\), Gallimard, 1991](#)

[Vie et mort de l'image \(イメージの生と死\), Gallimard, 1992](#)

[L'Etat seducteur \(誘惑する国家\), Gallimard, 1993](#)

[Manifeste mediologique \(メディアオロジー宣言\), Gallimard, 1994](#)

[Transmettre \(伝達\), Odile Jacob, 1997](#)

[Cours de médiologie générale \(一般メディアオロジー講義\), Gallimard, 1991](#)

メディアオロジーの総論。390ページにおよぶ大著。コミュニケーションとは無垢なものではありえないとし、コミュニケーションに代わる概念として媒体を介した「トランスミッション」を導入する。それを軸に、メッセージが制度化する過程を扱う学問としてメディアオロジーを提唱。具体的な分析モデルとしてキリスト教神学の発展過程を取り上げ、手書きから印刷物への変化とフランス革命との関わりについて論じ、媒体が思想を規定するという論を検証する。次に「象徴の生態学(エコロジー)」という観点から、社会主義運動が展開し失敗に至る過程を描き、続いて政治における媒体の機能を検討し、権力による検閲の諸相についても述べている。最後に、今の時代が、媒体の変化という点で16世紀とアナログカルな関係にあると論じ、現代のリアルタイム性がもたらす身体性、直接性、無時間性（歴史の欠如）を浮き彫りにする。

### **Vie et mort de l'image (イメージの生と死), Gallimard, 1992**

広い意味での「イメージ」を通じて、西欧の歴史を検証する一種の文明論。先史時代の洞窟絵画などに付された死の意味から出発し、イメージが記号を生み、集団を構成していく様を概論的に検討していく。キリスト教神学が偶像を許し、それを自ら利用していく過程を描いてみせ、さらに、カントに始まる唯心論的な芸術論を唯物論的に批判しながら、メディアオロジーの立場を明確にする。続いて「芸術」の概念が近代の所産であること、ギリシア時代から中世にかけて、「芸術」が独立して存在していたわけではないことを指摘し、風景画と肖像画が近代になって現れる様に言及。偶像から芸術、次いでビジュアルへと変化する歴史の流れを概観し、「見かた(視線)」には普遍性はなく、イメージは集団、地域などによって規定されていると論じる。さらに、写真や映画、テレビなどによる視覚芸術の再編を取り上げ、現実を支えていた従来のイメージが、ビジュアル時代において現実そのものになっていることの社会的影響を検討しながら、現代における新たな「指標」(記号以前)を浮き彫りにする。

## Manifeste médiologique (メディアロジー宣言), Gallimard, 1994

メディアロジー関連著作を業績として、大学教授資格、および博士号を取得するために書かれた審査論文二編を収録。これまでのメディアロジー関連著作のエッセンスをまとめている。メディアロジーが、従来の記号学、社会学、歴史学を補完し得る可能性を示す。同時に、象徴の生態学として、種の多様性のように「媒体の多様性」保護についても検討する。

## Transmettre - éléments de médiologie (伝達 - メディアロジーの諸要素), Odile Jacob, 1997

本書は、いわばドゥブレーによる「メディアロジーのススメ」。これまでの著書で述べてきた「伝達」の諸相として、ここでは組織化される物質(matière organisée - MO)と物質的組織化(organisation matérielle - OM)の2つの要素を基に、メディアロジーの周囲で交わされている議論を検証している。本書には特に [スティグレールの著作](#) の影響が色濃く出ており、文化と技術が相互に対立するという従来の構図を批判し、それらが相互に作用しあうものであることを改めて説き、「**身振りと言葉**」などの [ルロア-ゲーラン](#) (André Leroi-Gourhan)の著作をとりわけ高く評価している(98年2月現在、邦訳が絶版となっているのが残念)。また、文化的事象をすべて脳や再生として位置づける生物学的視座を、技術との関わりが考慮されない点から批判する一方、人間中心主義的な視点に立つ社会学についても、外部として現れる自然との関わりを考慮しないと批判し、孤高の学としてメディアロジーを位置付けている。その厳粛な姿勢は、ある種の感動すら与えるほどだ。

Text: 98年3月

### 3. 機関誌「LES CAHIERS DE MEDILOGIE」から

#### 創刊号「『見世物』の危機」

96年4月、『カイエ・ド・メディアロジー』誌が創刊された。その初のテーマは「見世物(スペクタクル)」である。進行する「イメージ産業の世界化」(ハリウッド映画、ディズニーの欧州進出など)によって、フランスでは自国の文化産業の危機が説かれ、それはヨーロッパ(特にフランス)の「文化例外」議論に火をつけていた。だが、すでにドゥブレは『イメージの生と死』の中で、イメージ全般のもつ広範な

伝播力を示唆していたのではなかったか。アメリカのイメージ戦略は、イメージのもつそうした世俗的伝播の力を最大限に活用していたのだといえるだろう。ヨーロッパは遅れを取らざるを得ず、かくしてそれは「危機」として認識されていた。『カイエ』の創刊号が見世物をテーマに掲げた背景には、そうしたせめぎ合いの力学を取り上げようという意図があったに違いない。だがメディアロジーはすでにして一枚岩ではありえない。かくして実に多様な論点がそこには投入されている。

ドゥブレやブーニューの立脚点は、上演としての演劇が記号学的断絶、つまり記号と指示対象との分断と平行なものであると捉えることにある。「意味とは反響に他ならない」のであり、生きた体験は「距離を置かれて初めて響鳴する」(ドゥブレ)。演劇は「死と生との狭間にある不確定な距離」として実現する(ブーニュー)。テレビの隆盛はそうした断絶を薄め(指標としてのテレビ)、結果として演劇に対する関心も薄らいでいくというわけだ。だが、ピエール・レヴィは、そうした記号学的断絶と見世物とを同一視することはできないと批判する。ここでいう記号と指示対象との分離は、いわば役者の身体の二重性ということになるだろうだが、ブーニューにおいてはむしろ、舞台と観客との分離にその二重性の支えを見ている。そこからテレビがそうした垣根を曖昧にしている(つまり参加型にしている)という批判が出てくるわけだが、するとテレビドラマにおいても役者の身体の二重性が維持されていることの説明がつかないのではないだろうか。それゆえ、むしろ演劇やテレビのそうした二重性は、それぞれを機構あるいは装置として見る視点から考察されなければならないことになる。こうしてレヴィは、テレビは指標として距離を無効にするというよりも、むしろ現実をそのものとして立ち現れさせようとする装置なのだ論じる。「誰からも知覚される存在」となったテレビ映像においては、人は参加するのではなく、逆にそのまなざしが誰か他者のまなざしによって制御され、自分の参照の枠組が崩壊してしまう。いずれにせよ、装置をとりまく「メタテクスト的」なものは詳細に再考する必要があるだろう。

映画はどうか。シミュラクルそのものは太古の昔からあった(ジャック・ペリオ)。幻灯機はその昔、行商人とともに各地を巡り、それは口伝えで民衆の間に広まり、「市」が開かれればその地で上映がなされていた。サーカスに取り込まれ上映されることもあった(モニク・シカール)。ここまでは演劇の上演形態とさほど違いはないように思われる。宗教改革の後に禁厄の対象となったりしながら、演劇もまた上層・下層に二分化していた。民衆の演劇はやはり幻灯機の上映と同じような空間で上演されていた。だが、映画においてそうした連続性には断絶が導かれる。もちろん世俗的には見世物として流布するにせよ、リュミエール兄弟がもたらした映画は、動体写真法に端を発する科学の欲望を担っていた。だが一方で、映画館には世俗的な聖性が付与される。それはプロテスタント教会などが演劇を「ディアボリック」なものに見なしたことと平行だ。アメリカ映画やテレビの影響によって、そうした聖性は降格させられている。映画の説話性そのものも変容する。ジャ

ン=ミシェル・フロンドンはそうした見世物の画一化をきわめて政治的な問題だと述べ警鐘を鳴らす。

見世物にはさらに儀礼やスポーツの類も含まれる。フランソワ=ベルナル・ユイグは、カール・ポパーの言葉(「知性は虚偽から始まるのではないか」)を引き、見世物が観客にとって言語活動としての意味をなすことを示す。儀礼化はまさにその典型だ。聖アウグスティヌスにとって、言葉そのものがプシケーを基礎づける行為の確立することにほかならなかったように(ジャン=イヴ・アムリーヌ)、儀礼化によって、主体は感情の中に没せぬよう、客観化を図ることができるのだ。たとえばそれがトラウマを真に消失させるものではないにせよ、それに結びついた感情、感覚は解放されうる。それがカタルシスの機能である(セルジュ・ティスロン)。ジャック・アトランが小コラムで示すように、マーシャル・アーツなどに見られる段位は、ヒエラルキーを強調したものでありながら所属する者には受け入れられている。あるいはそこに、暴政に結び付かない位階の新しいモデルが見出せるかもしれないという指摘は、検討してみる必要があるかもしれない。

この号には、アントワーヌ・エニオンとブリュノ・ラトゥールによるベンヤミンについての考察が再録されている。ベンヤミンは複製が本物のもつ信憑性を失わせるとしてこれを批判するが、その信憑性こそが宗教的な人工物でしかないのだとこの論者たちは指摘する。オリジナル概念は歴史的に構築されたものでしかなく、近代以前においてはそもそも存在さえしなかった。だとすれば、複製化はオリジナルの弱小化ではありえないということになる。歴史的には、むしろコピーの中からこそオリジナルは生まれた。たとえば1750年ごろまで、オペラには「これぞ定番」というバージョンはなく、繰り返しその都度作り変えられていた。安定した「バージョン」ができあがるのは、実は20世紀になり、レコード産業がそれを要請した頃からだったという。絵画もまた、レンブラント以降に、全仕事の「作者」が誕生する。われわれはこうした視座を忘れるわけにはいかないだろう。柳田国男がかつて日本の伝統とされるものの多くがたかだか1世紀程度の歴史しかないことを指摘していたように、様々な伝統(文化)が形成される過程、その混然とした「前史」を掘り起こす作業が課せられている。

## 第2号「『路』とは何か」

「人の後に路はできる」という句を、ドゥブレは「人の前に路はある」と言い替えてみせる(『伝達作用』)。人間が作る路はいわゆる獣道ではないからだ。路はあくまで社会的な産物であり、そして社会を規定する産物でもある。それは物資の輸送ばかりか文化の輸送をも担っている。ゆえに路はメディアロジーの考察対象とされなければならないのだ。かくして『カイエ・ド・メディアロジー』第2号(97年秋)は「路とは何か」の表題のもとに、道路に関する様々な論考を集めている。

同号で特に目を惹くのはフランソワ・ダゴニエ(Francois Dagognet)の参加だ。「路、反路、メタ-路」と題された論考では、形而上学が木をモデルとしていると言われることについて、それ以上に **道路がモデルになっているのではないかと** 論じている。また、路のエッセンス(情報の流通)は高速道路においてよりよく体现されるとし、高速道路がメタ-道路であるとしてこれを讃えている。中心を重視し都市部と農村部とを対立構図に置く鉄道に対して、両者を接近させその脱中心化をはかるものとして道路が対置されるのだが、そこにはダゴニエが指向するいわば「中間物へのまなざし」がある。ダゴニエはまた、道路工事を専門に手掛ける企業の代表らに技術面についてのインタビューを試みているが、そこからは、道路工事の技術が車両の改良と不可分に結びついてきたことが明示されている。ダゴニエには、他の著作からも、技術の発展をむしろ肯定的に受け止めようとする姿勢が見られるが、それは鉄道との対比において道路の発展に自由を見ようとする技術者たちの姿勢と呼応しているといえるだろう。

ブロック(Numa Broc)は路に関する議論の歴史を簡単に紹介しているが、そこからは、地理的な決定論と、人間の意志(国家を媒介とする)を中心に見る立場とのせめぎ合いの歴史が垣間見える。だがユイーグ(Francois-Bernard Huyghe)が指摘するように、路はあくまで特定の「結果」をもたらすために建造されたのであり、地形よりは接触(連絡)の必要性からもたらされたものなのだろう。一度造られると、その路の上を物資や情報が流通するようになるが、その時点で今度は、道路も含めた広い意味での地理的状况が決定論的に作用する場合も生じるだろう。かくしてヴァレ(Odon Vallet)が論ずるように、**仏教、キリスト教、イスラム教の伝播は、それぞれ地理的条件や輸送技術に左右されていく** のだろう。仏教の伝播は陸路づたいの北方ルートは長い時間を要し、南方ルートは沿岸沿いに近接した地域に広がっていくのだ。

海路や空路もまた「路」であることを、グラス(Alain Gras)は偶話的に示してみせる。それは限定された空間であり、ミシェル・セールがインタビューの中で答えているように、**伝達網とはすべからく「ボックス」をなしている** のだ。道路はいわば「屋内」であり、路上にいるとは、外にいると信じつつも内部にいることなのだ、とセールは言う。そしてそこから外にでることが肝要なのだという。これはつまり、道路が強要してくる認識の外へ出よということ、ルソーのように「何も見逃さないこと」なのだ。

実際、ソンペラック(Arnaud Sompairac)は、道路をかざる標識が新しい「絵文字の風景」を現出させたと論じている。それは「次々に消費される風景」(すぐにバックミラーへと押し流され消えてしまう風景)であり、新しい知覚のあり方を告げるものだった。ここでは自動車が中心に考えられているが、それ以前にも、自転車の普及がすでにそれを告げていたことを、ベルト=ラヴニール(Cathrine Bertho-Lavenir)が論じている。ツーリングクラブを結成した愛好家たちは、道路行政に対

する圧力団体となっていくのだ。

そして今、道路は「情報ハイウェイ」という形でメタファー化されている。シカル(Monique Sicard)は新しい技術には常にメタファーと新語がつきまとうと述べ、言説と理想論が先行するとしている。そしてリュセ=ルマリエ(Isabelle Rieusset-Lemarie)は、速度の増大によって情報が脱情報化していくことに批判のまなざしを向けている。

人造物としての路は、様々な意味の付与を受け、また意味を付与してきた。その錯綜体をわずかでも解きほぐすことが、ネットワーク社会を考える上でも必須の課題だということがわかる。最初に記したダゴニエのテーゼはとりわけ再考に値するだろう。路は形而上学のモデルとして機能したという仮説だ。この着目点はきわめて重要だと思われる。ブーニュー(Daniel Bougnoux)も、道路網が世界に投影された象徴的瞑想であるとして、そこから理性が立ち上がったのだと指摘している。だが、一方で、自然に対する人間の関わりを同程度、あるいはより根源的に現出させる可能性が、同誌が取り上げていない水路にあるのではないか、とも考えられる。水路については別項で検討したいと考えているが、いずれにしても同誌のこの特集は、豊かな指針を与えてくれることだろう。

Text: 99年6月

### 第3号「古きネーション、新しきネットワーク」

国家は様々なネットワークから成り立っている。それは目に見える設備であったり(鉄道、水道など)、誰もが理解していながらも、なかなか見えにくい制度であったり(郵政、電信、テレビ、コンピュータネットワークなど)と様々だ。言語もまた、国家にとっては重要なファクターである。「カイエ・ド・メディアロジー」の第3号(97年4月)は、ドゥブレー自身の編纂により、国(民)とネットワークについての論考を幅広く取り上げている。だが、取り上げた問題の領域が広すぎたせいか、個々の論考の内容には堀下げがやや不十分ではないかという印象が残る。その意味では、本号は必ずしも成功してはいないのではないだろうか。だが微細な、遅々たる歩みを積み上げていこうとするメディアロジーにとっては、こういう広い範囲の問題の列挙も、それはそれで興味深い論集を成しているのかもしれない。雑多なもの列挙。必ずしも方法論的に吟味されているわけではないが、そういう寄り合いのような雰囲気は悪くはないかもしれない。

人工衛星、Webのナビゲーションの問題やネットの問題、韓国のメディア状況、映画と国家、テレビ論、言語政策の問題など、ほとんどテーマのるつぼと化している。これはやはり各論的に検討する方が良さそうである。そういうわけで、各論考に触れるのは控えさせて頂き、最下の個人的関心領域に関わる論考から3点のみ、



とりあえずポイントのみをかすめていくことにしよう。

アンドレ・ギエルム(Andre Guillerme)によれば、フランス語で「網」を指す *reseau* は、ルネサンス期には女性が下着として着用していた網(*reseuil*)に由来し、17世紀に織物師や籠編職人らが編目を示すものとして使われるようになる。さらに土木作業に転用され、19世紀には国土の補強、水道のシステム、道路など空間の整備にも用いられるようになる。また18世紀には天文分野でも使われるようになり、18世紀後半には測量術においても見られるようになる。網はこうして、自然に対する人間の側からの政治的な力の介入手段と見なされていた。

だが自然ばかりでなく、制度としてのネットワークもある。カトリーヌ・ベルト-ラヴニール(Cathrine Bertho-Lavenir)はフランスの郵便制度の小史を記しているが、それによると、郵便制度は常に(古くはファラオの時代やローマ帝国の伝令など)政治権力と結び付いて生じている。革命を経て18世紀の終わりには、早くも民主主義と郵政とを結び付ける議論がもてはやされていた。民主主義と結び付き、市場に支えられることによって、郵便事業は欧州内、そしてすぐに世界的なネットワークを作ることになる。だがやはり政治との結び付きは今に至るまでくずれることがない。

ネットワークが政治に結び付いているとはいっても、かならずしもそれは中央集権的なモデルに依っていると限らない。トゥニエール-ビュショ(Teniere-Buchot)とバラケ(Barraque)は、それぞれ水道についての小論を寄せている。前者は、水道網は本来的に水源と密接に結び付いたローカルなものであること、したがってそれは本質的に一つの中心に収斂するものではなく、中心はいたるところに存在すること、水系は始まりも終りもない循環構造になっていて、それを管理する政策も(フランスの場合)、同じく循環的であることを指摘している。水系の論理は、地方分権、あるいは民主政治のモデルになる可能性があるという示唆だろうか。後者においては、水の管理が自然の地形への人為的介入であることを再確認し、需要の伸び(産業、飲料水)が突き付ける技術の問題を問い直している。それは時に狂気にすら至るのではないかと。

では、政治から逃れたネットワークの有り様というものはありえないのか。今のところ、どうやらそれは「ありえない」と言うのが妥当なようだ。こうして私たちが遊んでいる(良い意味において)インターネットも、様々な場面で有形無形の政治と関わっている。サイバーデモクラシーの幻想なども含めて狭い視野に向かって閉ざされるのではなく、より雑然とした健全なる多様性に向かって開かれていくにはどうしたらよいのか。水系の論理は、他のネットワークについてもモデルとすることができるのだろうか。そもそも水系の論理は、本当にトゥニエール-ビュショが言うような散逸と循環の構造になっているのか(なりうるのか)。これは検討に値する問題だろう。

Text: 98年5月

## 第4号「紙の力」

溢れんばかりの紙、紙、紙…。ちょっとしたメモ用紙から日常雑貨に至るまで、私たちはいわば文字通り「紙に取り巻かれる」形で日々生活している。普段あまりにも自然な存在である紙に、私たちはさほど注意を払わないが、そこには様々な文化史的記号と機能とが付与されている。記憶媒体として長い歴史を誇る紙は、今日のように電子メディアが優勢になろうとも、早々に消えてなくなるような「メディア」ではなさそうだ。97年10月刊行の「Les Cahiers de mediologie 4」は、ありふれていて普段私たちの視界から見え失せているこの媒体に注目し、紙がもたすもの、紙が担うものについて様々な角度からの考察を集めている。ここでは問題を整理しながら、いくつかの論をごく簡単にまとめてみよう。

### 歴史

製紙技術は中国からヨーロッパへともたらされた。紙自体はシルクロードに沿って5世紀末ごろには西欧に伝わっていたらしいが、製紙技術の?`播を決定づけたのは751年の「タラス(Talas)の戦い」(唐とサラセン帝国が合まみえた)である。サラセン側の捕虜に紙漉工がいて、757年にサマルカンドに製紙工場ができる。さらにイベリア半島経由で欧州に入り、フランスのエローに最初の工場ができるのは1189年のことだ。

これより先の1050年ごろにはエジプトから地中海経由でシチリアに製紙技術が伝わり、13世紀初頭にはイタリアのファブリアーノにも製紙工場ができた。書物史家のFrancois Dupuigrenet des Roussilesは『蔡倫の銀河系』(蔡倫は中国において西暦105年、後漢の時代に紙を発明したとされていたが、今世紀の考古学的発掘により、実は起源前1世紀、前漢の時代に紙があったことが分かっている)と題する記事で、紙の歴史を大まかに紹介しているが、イスラム圏とは逆に欧州での紙の普及は遅々としたもので、15世紀なかばまでは獣皮を原料とするパーチメントの方が安く大量に出回っていたことを述べている。紙は保存性がよくないと思われていたのだ。当時の原料はボロ麻布で、製法は当然ながら手漉である。一方、冶金技術の進歩により、14世紀末に伝わっていた木版にかわるものとしてグーテンベルクの活版印刷術が生まれ(冶金はまた、透かす紙製造の線引きにも影響を与えた)、紙の需要も高まっていく。だがこのころから質的な面での低下を招いている。17世紀末からは、滲みを無くすサイジング処理において、それまでのゼラチンにカリウムミョウバンを混入するようになり、紙が酸化しやすくなってくる。さらに18世紀には原料のスラッシュ方法の変化や塩素漂白により、紙の耐性はかなり低下した。

紙不足を招くようになった18世紀、ロジン(松脂)を原料に加える技法が出現する。

さらに1840年ごろには、ドイツで木材パルプが原料として用いられるようになる。1854年には英国で化学パルプの特許が与えられ、亜硫酸パルプ(1867、米国)、クラフトパルプ(1880、スエーデン)がそれに続く。1798年のロベール(Louis-Nicola Robert)の抄紙機の発明、1807年フルディニエ(Fourdinier)兄弟による実用化がこれらに加わり、大規模生産が可能になるが、質的な低下は免れなかった。かくして Astrid-Christiane Brandtは、19世紀から20世紀前半の書物を対象に1990年に行われたフランス国立図書館所蔵本の調査では、260万冊が危うい状況になっているとコラムで警告している。また、巻頭論文を載せているPierre-Marc de Biasiも同様の警告をしている。

## 紙にまつわる問題

この状況は日本や諸外国でもほぼ同様で、永久紙の開発やマイクロフィルム化、デジタル化も進んでいるが、「オリジナルを保存したい、参照したい」という要求が壁として立ち塞がっている。『エクストラストロングの謎』という論文でClaire Bustarretは、作家研究における紙の検証の有益性を説いている。作品の生成にまつわる指標がそこにはあるというわけだ。したがって失われつつある紙の保存、または修復は重大な問題になる。保存修復の専門家Eleonore Kisselとのインタビュー『紙の倫理のために』では、修復がさらなる劣化につながる場合も指摘されている。例えば、黄ばんだ紙を漂白する場合には酸化物を用いるが、これにより紙の繊維が劣化するし、また、漂白剤を完全に洗い落とすことは不可能なのだという。修復家の職業倫理として、より影響の少ない処理(水での洗浄)から始めて、漂白は最終手段とすべきであり、また依頼者への説明(影響も含めて)が必須だとしている。一方で未整理の文献(建築設計にまつわる技術文書、図面類)の保存場所、スペースの問題も取り上げられている。スペースに関しては図書館も同じ問題を抱えている。消えゆく書物の修復保存と、保存場所の確保。背反する難しい問題が課せられている。

一方で森林保護の問題もある。インタビュー記事においてINRA(フランスの国立農業研究所)のRaphael Larrereは、資源の再生を損なわない伐採方法の必要を改めて述べている。Karine Douplitzkyの小論『紙の代償は?』でも、今後50年間で消費が倍増してもさしあたりの需要はまかなえたとしながらも、やはり森林管理の必要性を繰り返している。また、紙のリサイクルに税制上の優遇策を与えているドイツに対し、フランスは産業としてのリサイクルが立ち後れているとも述べる。

## 文化を担う紙

大量消費と産業の世界化に揺れる紙だが、それが文化的に不可欠なのは確かだ。「カイエ」に掲載の小論も多岐にわたっていることもあり、ここでは概観だけを記しておこう。フランス銀行の頭取Jean-Claude Trichetのインタビューは、

シュメールにおける文字の起源が行政の会計記号<sup>?</sup>に結び付いているという話などから始まっていて、欧州の経済人の懐の深みを感じさせる。さらに、パリ控訴院付きの鑑定家Jean-Louis Clementらのインタビュー、作家たちの紙へのこだわりを論じるMarie-Laure Prevost(国立図書館司書)、紙から見た新聞の略史(Philippe Thureau Dangin)、手紙に使用される紙の変遷(Catherine Bertho-Lavenir)、フランスとアメリカの出版文化の差異(Francois Cusset)、絵画で用いられる紙と布との関わり(Frederic Mora)、写真の感光紙(Louise Merzeau)、折り紙論(Jean-Claude Correia他)など、個別に興味深い文章が並んでいる(これらのいわば「各論」については、日を改め(ページを改め)て取り上げることにしよう)。

さて、こうして基本的なところを概観してみて感じたことをまとめておこう。まずは技術の受容の問題だ。上に記したように、紙がパーチメントを駆逐するのにはかなりの時間がかかった。紙は一段低く見られていたのには、価格などの経済的要因と、耐久性が低いという技術的な要因があったとされる。それが逆転するのは印刷技術の発展であるかのような印象を受けるが、それを検証するには、印刷技術の黎明前にパーチメントと紙がどのように棲み分けられていたのか、そして製紙業の側にパーチメントに近づけようとする技術改良の動きはなかったのか、などといった問いも発せられてしかるべきであるように思える。これは西欧における和紙の受容についても考えるべき問題だろう。周知のように、19世紀におこったジャポニズム運動に和紙が与えた影響は大きいが、和紙技術が西欧において広く浸透したという話は聞かない。これはパーチメントに対するかつての西欧の視座と平行な関係にあるのではないか。いずれにしてもこうした部分を掘下げる必要があるだろう。

人が紙を意識するのは、問題の累積がなんらかの形で現前する時だろう。19世紀ごろの作家や一般人が紙を意識したのは、良質な紙が不足していたからだという。媒体が意識されるのは、程度の差こそあれ、ある種の危機的状況においてなのだと思えば、メディアロジーはそうした状況を掘り起こす作業であるとも言えなくはない。だが紙の場合、文化的諸相の基礎にありながらも、印刷技術や複製技術を支えるという二次的な地位を与えられるに留まっているようにも思える。こうした視点を補完するのは、やはり日本を含め東洋の紙文化の視点だろう。

そうした意味合いも込めて、日本語で読める包括的な入門書として渡部勝二郎著『紙の博物誌』(出版ニュース社、1992)を挙げておこう。上に記したごく大まかな内容の多くが取り上げられているほか、日本との対比、日本の紙文化の紹介という点で見逃せない一冊だと思われる。

Text: 98年3月

#### 4. 『Le Debat』誌の批判、そして反論

95年の『Le Debat』誌85号(5月 - 8月、Gallimard)は、「メディアオロジー」を特集として取り上げた。関連分野を代表する5人の識者が批判を寄せているほか、それらに対するドゥブレー本人の反論を掲載している。批判は辛辣な(悪意を感じさせる)ものから発展性のあるものまで様々だ。メディアオロジーの弱点や課題をも視野におさめるべく、ここでは掲載された各批判の要点とドゥブレーの反論とを簡単に検討しておきたい。

##### ロジェ・シャルティエ(Roger Chartier)

「心性史」としての書物の歴史についての見方を一変させたロジェ・シャルティエ。そのシャルティエはドゥブレーによる記号学的分析への批判や、物質性を視野に入れつつ書物などのメディアムを考察する立場には共感を寄せているが、まずは歴史学に対する差別化について疑問を提示する。歴史に「巨視的な概念化モデル」を与えるのだとするドゥブレーに対し、シャルティエは、歴史の理論は哲学的に大上段からもたらされるわけではなく、個別研究においてこそ存在するのだと言う。また、「メディア圏」の三分割にはすでに前例があること(ヴィーコ、コンドルセ、マレシエルブ)、そしてドゥブレーの分割が恣意的であることを示している。言語圏(ロゴスフェール)においてすでに書かれたものが中心に位置しているとするドゥブレーに対し、マレシエルブは同時期には口承性こそが中心的だと見なしているという。シャルティエはこのことから、言語圏自体もまた二つに分割できるのではないかと提案する。文字圏(グラフィスフェール)では図像はテキストに従属していたとされるが、シャルティエはそれは単純化だとし、図像が独立性をもっていたことを指摘する。映像圏(ビデオスフェール)についても、テキストを新しい形で読む場合をも考慮しなければならないと指摘する。またメディア圏の分割が書の使用を基準にしていることに着目し、むしろ2、3世紀ごろに出現した冊子形態こそが決定的なものではないかと述べている。

総じてこれは、別の概念化も可能なのではないかというポジティブな指摘であり、ドゥブレーの側もそれを誠実に受け止めている。実際、すでに著書『メディアオロジー宣言』の中でも、メディア圏の三分割(ドゥブレーはさらに言語圏に先立つ記憶圏、映像圏に後置されるデジタル圏を含め五分割である可能性を示している)は、教育的な意味での単純化であり、取りこぼす部分も多いことを認めている。また先駆者の分割モデルは今の時代には合わなくなっていると述べる。一方、歴史学に対して新たな「学」を提唱する根拠として、視点における差異、記述モデルの効率性、技術と社会と文化の接点に関わる概念の欠如などを掲げている。一般に、ある学問において分類概念を措定する際には、その始まりと終りを厳密に措定することが要

求される。だが今や始点や終点を厳密に定めることは、危険でもありまた不可能でもあることは周知の事実となっているのではないか。とくに歴史的な事象の場合、それはむしろ流れの概念で捉える方がよいのではないだろうか。メディアロジーはむしろそうした流れに敏感でなくてはならないのではないか。支流、本流、合流、断絶よりも連続性。ドゥブレーはメディアロジーが隣接する諸学問分野を補完する位置にあると述べているが、ならば認識のあり方においてもそうあるべきだろう。この意味でも、後述のスティグラーが示唆する「メタメディアロジー」的なものが、ぜひとも必要になってくるだろう。

## ダニー＝ロベール・デュフール(Dany-Robert Dufour)

デュフールはまず、時代と場所を特定せず様々な事象を散りばめるドゥブレーの書き方がハイパーテキスト的だとして、それが取りこぼすものを特定していこうとする。この立場は批評としては危うい。というのも、それはハイパーテキスト概念を取り違えているからだ。ハイパーテキストはそもそも、参照体系を樹系図的(あるいは理想的にはリゾーム的)に背後に抱え、自由にそれらをたどって行けるという立体構造であって、決して異質なものが同一平面に並存することではないからだ。デュフールは、ハイパーテキスト的なものがアナロジー的なものを多用し、そこでの知へのアクセスは情報の相互の交換によってなされ、記述や議論はデータの変遷(parcours)に還元されてしまうという。だがそれはポエティックなものに言えることであって、決してハイパーテキストに内在する特徴ではない。デュフールは次に、ドゥブレーの記号学批判が初期の理論とその社会現象しか扱っておらず、「シニフィアンス」について無視していることを批判する。ドゥブレーは反論において、メディアロジーはあくまで記号学に対して補完的なまなざしを向けていることを説明している。デュフールはさらに、メディア圏の考え方には主体の概念が欠けていると指摘するが、これもまた「メタメディアロジー」的な作業の必要性を指摘しているにすぎない(欲望や主体の問題については、[ダニエル・ブーニュー](#)の仕事が重要になってくるだろう。「[イメージ論](#)」の項目も参照)。

## ロジェ・ローフェール(Roger Laufer)

ローフェールの批判は、主に『誘惑する国家』をめぐってなされている。そこでは、現代国家などのアクチュアルな問いをアナロジーとメタファーを駆使して論ずるのはいささかジャーナリスティックに過ぎるという批判が展開される。まずは随所に見られるその政治的観点がいささか古く、フランス中心に偏りすぎているということが指摘される。次にローフェールは、それは巨視的なスパンでの議論にも見られるとし、概念的な厳密さよりも事象への言及が重きをなしていること、そしてやはりメディア圏のモデルの区分けが不十分であるという議論を展開していく。だが、メディア圏のそれぞれは相互に重複し合っていることや、隣接する諸学との交差(補完関係)、より厳密な分析を要するといった主張は、ドゥブレー自身も随所で

述べていることである。したがって「メディアオロジーがありうるとするなら、時代を通じてのメディアの構成を研究しなければならない」(ローフェール)という点には異議はないだろう。ローフェールの指摘する数々の点について、メディアオロジーが敏感でないということはなく、また、それはメディアオロジーに関わる他の者をも含め、取り組んでいくべき課題ともなるだろう。

## ジャン＝ルイ・ミシカ

現時点(98年12月)では未読だがミシカにはテレビ論の共著があり、どうやらそれはドゥブレーの『フランスの知的権力』と対立する議論を展開しているようだ。自著を擁護しつつ展開されるミシカの批判は、まず、長期的な視野で構築された分析の枠組(方法と概念)が、短期的(同時代的)状況の研究にはうまく適用できないことを述べている。成熟に達した、あるいはそれを越えた記録技術についてはうまく説明できても、変化の途上にあるものは捉えにくい。メディアオロジーもあくまで「ミネルヴァのふくろう」だという。例えば『誘惑する国家』では、テレビの本質についてドゥブレーはイメージと視聴者との間で揺れ動いていると述べる。視聴者へと駆り立てられることがメディアの論理であるならば、多チャンネルとなりイメージと視聴者とが分離する時代はどうなるのか。テレビの今後の展開次第によっては、今現在その特徴だと考えられているものが消え去ってしまう可能性もある。今現在の特徴を研究するのならば、長期的なモデルを適用するよりも、すでに歴史のあるメディア社会学で十分ではないか、事実ドゥブレーもそうしているではないか、というわけだ。これはメディアオロジーのアクチュアルな批評性に関わる問題である。ドゥブレーは、テレビが若いメディアであること、メディアオロジーが長期的スパンの問題をよりうまく扱えることを認め、だがそれでもなお批評の道は開かれてくるだろうと述べている。長期的モデルと短期的事象。これは検討していかなくてはならない点となるだろう。

これに関連して、ミシカは技術による決定論に疑問を差しはさむ。「ペニープレス」は輪転機によってもたらされたのではなく、「ペニープレス」こそが輪転機を、そして電信の利用を活性化したのだという。メディアオロジーにはそうした企業的なものをも見る視座が欠けている、と批判するのである。だがドゥブレーの側は、あらためて社会の歴史が道具の論理によって媒介されてきたことを強調している。社会の歴史的視座があまりにも道具を無視してきたことに対して、ドゥブレーは挑発的に、その視線をずらそうとしているのだ。それはなにも厳密な決定論というわけではない。両者の相互作用こそが重要なのだ。これも忘れてはならない点だろう。

## ベルナルド・スティグレール

スティグレールは『カイエ』にも関わっているが(「[スティグレールの技術哲学](#)」

の項目を参照)、ここでは批判を、しかも最も本質にかかわる批判を展開している。この論考は『現代思想』誌の96年4月号に邦訳がある(廣瀬浩二訳、表記はアルザス系の読み方でシュティグレルとなつている)。メディアロジーは、いわば媒体を介しての広義の信念(宗教的信仰や集団の信頼などを含む)を研究するものだが、スティグレルの最初の問いは次のようなものだ。あらゆる信念には、物質性として具体化しない「原信念」が前提とされるのではないか、ということである。それはなんら具体的なものではなく、いわば信念(つまり先取りの意識)と、それを支える媒体とを結び付ける概念化不可能な概念である。それが放逐され隠されていることによって、実証性が維持されうるような呪われた部分だ。メディアロジーもまた、そうした原信念を意識しない前提の上に成立しているのではないか、メディアロジーには、自らの成立基盤を考察するメタレベルのメディアロジーが必要なのではないか。思想がメディアウムに記載されているのなら、なぜ思想はメディアウムを捉えられないのか。これはデリダのグラマトロジーに示される「シニフィアンス」(意味形成作用：シニフィアンの生成作用)と同根の問題だ、シモンドンのいう「個別化のプロセス」も、プロセスの起源において起源の不在を抱えている、とスティグレルはいう。

これを受けてドゥブレも「メタメディアロジー」の必要性をほのめかしている。「痕跡がなければ思想はないが、痕跡が思想を作り上げるわけではない」、差延によって痕跡は常に他のものを指し示すが、実証性としての媒体からはそれを捉えることはできず、また、補綴が生じた起源の不在はいかなる補綴をもってしても塞がれないからだ、だが、そのことを一次保留にしているのは方法的な要請によるものであり、メディアロジーはまだその域には至っていないのだ、とりあえずは、媒介作用、この排除された第三項の方へと向き直ることが重要だ…。だが、やはりメディアロジーはメタレベルをも視野に入れて、さらに発展していかなければならぬだろう。課題は多く残されているが、それらに取り組む道は開かれつつあるのだと思われる。

Text: 98年12月